

## あとがき

本編者の私自身がワンヘルスに関心をもつようになったきっかけは2020年以来世界を席卷したCOVID-19によって日常生活はもちろんこと、フィールドワークをもとに行ってきた地域研究が大きく制約されたことに大きな衝撃を受けたことに遡る。同年2月に予定していた中国現地調査のための国際フライトをキャンセルせざるを得なくなり、また緊急事態宣言下で在宅勤務中心の生活となって以降は、進行中だった共同研究をメールやオンライン会議で継続しつつ、自宅からインターネット上で刻々と変わる世界情勢を追いながら、パンデミックという非常事態に対して地域・環境研究者としてどのような貢献ができるのか自問自答しながらPCの画面を見つめる日々が続いた。

20年ほど前にCOVID-19と同じく中国を震源地とした重症急性呼吸器症候群(SARS)が流行した際には、渡航禁止になった中国で起きていた非常事態を対岸の火事として眺めていただけで自らの研究テーマとは距離があると考えていた。しかし今回のパンデミックでは中国社会は震源地であると同時に私たちの社会とつながる同じ世界の一角として何が起きているのかをつぶさにみておく必要があると強く感じた。幸いSARSの時代よりも格段に向上したインターネット技術によって中国のみならず世界各地の関連情報にリモートで、時にはZoomなどを通じたウェビナーによってリアルタイムで自宅にしながらアクセスできたことによって、これまであまり馴染みのなかった新興感染症や人獣共通感染症の原因や背景について理解を深めることができた。そのなかで今回のパンデミックは医学や獣医学の問題だけでなく、私自身が関心を寄せてきた広くエコロジーと健康に密接に関連する問題であること、また中国のみならず日本を含むアジア地域はその重要なフィールドであることを確信するに至った。そして本書の主題であるワンヘルスに着目して、文献サーベイをもとにまとめた小論が拙稿「新興感染症パンデミックのエコロジカル・リスク・ガバナンス：統合的健康アプローチ『ワン・ヘルス』の課題」(『環境経済・政策研究』14(1), 59-63, 2021年3月)であった。

この小論をふまえ、COVID-19による緊急事態宣言下での研究生活に不自由ながらもいくらか慣れてきた2021年度には、同僚たちに声をかけてワンヘルスを掲げた共同研究を模索すべく所内の少額研究助成制度を利用して「ワンヘ

ルス研究」勉強会を立ち上げ、外部講師をオンラインでお呼びして議論を行った。その際に戸上絵理氏（当時世界保健機関，現在ジョンス・ホプキンス大学）から「ワンヘルス研究に求められるもの」（2021年6月17日），ハイン・マレー氏（当時総合地球環境学研究所，現在京都府立大学）から「パンデミック：エコヘルス，ワンヘルス，プラネタリーヘルス」（2021年7月9日），蔣宏緯氏（当時総合地球環境学研究所，現在国立環境研究所）から「南中国・東南アジアの村落における食生活・食文化と外部開発の影響」（2021年9月30日）と題した報告をしていただいた。このうち戸上氏と蔣氏にはその後研究会のメンバーとして加わっていただき本書の一章を執筆いただいている。またその後の2年間の研究会でも多くの外部講師の方々からご教示いただいた。赤嶺淳氏（一橋大学）から「グローバル・フードシステムを追う：マルチサイテッド・アプローチの可能性」（2022年5月27日），前田健氏（国立感染症研究所）から「日本・アジアにおける動物由来感染症の広がり（経緯や現状の概観）とワンヘルスの観点からの対策・研究にあたっての課題や留意点」（2022年6月17日），奥野克巳氏から「マルチスピーシーズ人類学，ワンヘルス，人新世——アナ・チン『マツタケ』のその後」（2022年7月8日），佐藤嘉和氏（酪農学園大学）から「『アーバンベア』研究から見た野生動物と社会の関係」（2022年12月2日），渡辺知保氏（長崎大学）から「プラネタリーヘルスの考え方と今後の課題」（2023年7月7日），松尾真紀子氏（東京大学）から「バイオマテリアルとそのGSD（Genetic Sequence Data）の国境を越えた共有における課題」（2023年7月27日），西野亮子氏（WWF ジャパン／TRAFFIC）から「ワンヘルスと野生動物取引」（2023年7月28日）をテーマに報告をいただいた。貴重な知見の共有をいただいた外部講師の方々，そして議論に参加いただいたオブザーバーを含めたメンバーのみなさまにここに記して感謝申し上げたい。

また福岡市で開かれた第21回アジア獣医師連合会（FAVA）大会「アジアからのワンヘルスアプローチ」および福岡県“One Health”国際フォーラム（2022年11月11～13日）（日付は編者の参加した日，以下同じ）や「野生動物と社会」学会大会（つくば大会）（2023年12月2～3日）など関連イベントへの参加，山梨県丹波山村の（株）アットホームサポーターズ「タバジビエ」や兵庫県の森林動物研究センターおよび環境部自然鳥獣共生課（2023年3月9日，同年8月4日）など野生動物管理の現場で活躍する団体・機関への訪問，

海外ではシンガポール国立大学アジア研究所（2022年11月22日）、ラオスの農林省林業局、熱帯公衆衛生研究所、サワンナケート県保健局、セポン郡保健オフィスおよび同群の村落（2023年9月3～9日）、タイ・バンコクにある国連食糧農業機関（FAO）アジア太平洋地域事務所（2023年9月11日）の専門家や地域住民らとの交流を通して多くの方々から研究、実務、実践に関する知見や経験をご教示いただいた。ここですべての方々のお名前を挙げることはできないが、会議や現地でのご教示・ご協力に謝意を表すとともに、本書が少しでもワンヘルスの最前線での諸活動を発展させる上で何らかの参考になればと願うばかりである（以上国内外の調査にあたっては、アジア経済研究所の研究事業費のほか、JSPS 科研費 18H03455, 17KT0121, 20KK0023 の助成を受けた）

本書の審査過程では、匿名の3名の所内査読者から丁寧かつ有益なコメントをいただいた。査読者からは厳しい評価を受けつつも、いただいた詳細な指摘事項への対応をすることによって2名の査読者からなんとか合格点をいただきここに出版することができて安堵している。貴重な時間を割いて本書の草稿を2度も丹念に読んでコメントをいただいた査読者の方々、ならびに本研究会あるいはその前身の勉強会の段階からワンヘルスという未知の研究テーマに共に取り組み、三度にわたる改稿に真摯に対応いただいた執筆者のみなさまに感謝する次第である。最後に、年度末に納期が迫るなか、編著者の校正作業を後押ししながら巧みに編集工程の舵取りをしていただいた成果出版課の同僚にも感謝申し上げたい。

2024年10月  
編者